

平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02074

研究課題名(和文) 18世紀フランスにおける中国表象：『百科全書』とその周辺

研究課題名(英文) Image of China in Eighteenth-Century France

研究代表者

小関 武史 (Koseki, Takeshi)

一橋大学・大学院法学研究科・教授

研究者番号：70313450

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、18世紀フランスにおける中国表象のあり方を、『百科全書』とその周辺文献を対象として、包括的に明らかにすることを目的としていた。当時、中国はヨーロッパ自身を批判的に検証するための鏡であり、多くの著述家は中国を論じながらヨーロッパについて語っていた。『百科全書』はまさにその論争の場として機能しており、ディドロ、ジョクール、ドルバックなどが、さまざまな角度から中国に言及した。その際、百科全書派の人々は旅行記をはじめとする先行文献を取捨選択しつつ利用した。そのような典拠文献との対比的読解を通じて、『百科全書』における中国表象のあり方を実証的に示したことが、本研究の成果である。

研究成果の概要(英文)：The aim of this project is to clarify globally the image of China in Eighteenth-Century France through analyse of the Encyclopedie and other related documents. In those days, China played a role mirror which enables authors to have reflections on European civilization; they argued on Europe in talking about China. The Encyclopedie was precisely a battlefield of this polemic, and China was the subject of various discussions by Diderot, Jaucourt and D'Holbach. Encyclopedists like them were based on preceding works such as travel writings, not without bringing their own point of view. By way of cross-referential lecture with source texts, the image of China in the Encyclopedie was to be presented positively.

研究分野：18世紀フランス思想史

キーワード：百科全書 中国 ディドロ ジョクール ドルバック

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 先行研究

大航海時代以降、異なる世界と遭遇したヨーロッパは、中国のうちに高度な文明を見出した。中国の存在は、キリスト教とは無関係に文明が構築されえたという意味で、キリスト教の絶対性を揺さぶり、西洋思想史上の重要問題となった。

ヨーロッパにおける中国受容の問題については、内外で多くの研究が進められてきた。早くも 20 世紀前半には、フランスのヴィルジル・ピノーが『フランスにおける哲学的精神の形成と中国(1640-1740 年)』(1932)を著す一方で、日本では後藤末雄が独自に『中国思想のフランス西漸』(1933)を世に問うた。いずれもフランス思想に対する中国思想の影響を論じたものだが、前者が考察対象を早い時期に絞っているのに対して、後者は 18 世紀末にまで筆が及んでいる。

両書によって大きな見取り図を与えられたこの分野の研究は、堀池信夫『中国哲学とヨーロッパの哲学者』(1996, 2002)や井川義次『宋学の西遷』(2009)によって、さらに深められた。その結果、中国の主たる思想潮流(宋学に代表される儒学)をヨーロッパの大思想家(モンテスキューやヴォルテール)がどのように受容したかが明らかになった。

### (2) 研究代表者の蓄積

研究代表者は、かねてより啓蒙期の辞典に注目していた。複数の執筆者が関与する辞典は、内部に矛盾を抱えながらも、全体としてはそれぞれに特徴がある。イエズス会編集の『トレヴー辞典』が伝統的なカトリックの価値観に裏打ちされているのに対して、『百科全書』は人間の知的能力への信頼を基調としており、路線が明確に異なる。両者が提示する中国観も同一ではない。

しかし、従来の研究では、辞典は断片的にしか考察の対象とされてこなかった。『百科全書』については、代表的な項目(たとえばディドロ執筆の《中国人の哲学》)を取り上げた研究は存在するが、それでは思想以外の側面が見逃されてしまう。『百科全書』が人類の知のあらゆる領野を包含することを目指している以上、中国観の分析も網羅的でなければならない。

さらに、『百科全書』の項目の多くは既存の文献からの引き写しであるため、典拠研究が重要な意味を持つ。『百科全書』を単独で扱うのではなく、周辺の文献を視野に入れることが必要である。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、18 世紀のフランスにおける中国表象のあり方を、『百科全書』およびその周辺の文献を対象として、包括的に明らかにすることである。包括的というのは、『百科全書』の全 17 巻 16,000 ページを対象にするだけでなく、典拠や執筆者ごとの特徴まで

視野に入れることを意味する。同時代の他の辞典との対比も念頭に置く。

具体的には、『百科全書』の中国関係項目の分類・整理、その典拠文献の解明、主要執筆者の中国観の分析、『百科全書』全体の中国観の分析、『百科全書』の周辺に位置づけられる文献における中国表象の検討、以上五つの点にわたって研究を遂行する。

## 3. 研究の方法

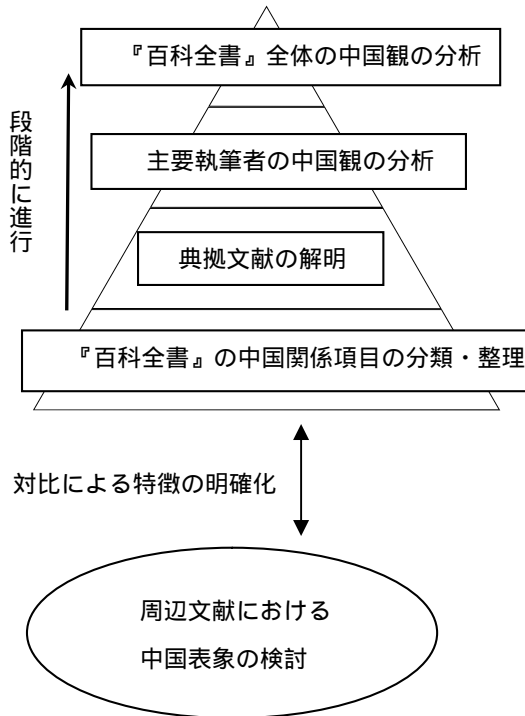
### (1) 実証的な対比的読解

本研究の方法は、実証主義的な「対比的読解」である。これには二つのレベルがある。『百科全書』内部での対比的読解と、『百科全書』と典拠文献との対比的読解である。この方法は、2010 年に発表した論文「偶像崇拜かつ無神論? 中国読書人の「天」信仰をめぐる『百科全書』の揺らぎ」(石川文康編『多元的世界観の共存とその条件』、財団法人国際高等研究所、p.61-79)においてすでに成果を上げたものである。その事例によって、対比的読解の概要を示す。

ドルバックが匿名で執筆した四つの『百科全書』項目のうち、二つ(《儒教》と《読書人》)は中国読書人を無神論者として描き、もう二つ(《儒道》と《天》)は彼らを有神論者として提示する。第一段階では、ドルバックの書いた文章同士を突き合わせ、その「矛盾」を抽出した。しかし、それは無理解による矛盾ではなく、実態はもっと複雑であることが、典拠文献との照合によって明らかになる。ドルバックが参照したデュ・アルド神父の『中国帝国全誌』は有神論説で一貫しており、中国読書人の「天」信仰をめぐる典礼論争をイエズス会にとって有利な方向で終息させようとしていた。ドルバックはその誘導をかいくぐって、意図的に両論併記の状況を生み出して論争を再燃させたのである。このように、対比的読解は『百科全書』の分析方法として有効である。この方法を、本研究全般に適用した。

## (2) 段階的進行

本研究は、次の図で示すように、段階を追って進められた。



## 4. 研究成果

三年間の研究期間を通じて、上記3で記した方法に従って、段階を踏んで典拠調査を遂行した。そうして得られた研究成果を年度ごとに記し、最後に全体を総括する。

(1) 平成27年度には、『百科全書』の中国関係項目の分類・整理を完了させた。信頼の置ける『百科全書』初版初刷を参照し、中国への言及を何らかの形で含む項目を711個拾い出した。それらをデータベース化するに当たっては、見出し語タイトルや執筆者、所在情報（巻やページ）、分量といった基本情報に加えて、項目本文を転写し、分類欄、典拠欄、調査によって明らかにできたことを書き入れる欄を設けた。中国への言及内容に即して研究代表者自身が独自に行った分類（『百科全書』それ自体の分類は本研究課題の観点からはふさわしくなかった）は、概論、地理、博物学、歴史、政治、通商、哲学宗教、習俗、言語、学問、技術、

その他、に区分される。必要に応じて、適宜下位区分も設けた。典拠文献の解明についても、一定の進展を見た。サヴァリーの『商業辞典』については、無断利用されているケースも含めて、『百科全書』による利用実態をほぼ明らかにすることができた。典拠研究の成果の一部は、フランス科学アカデミーが中心になって進めている『百科全書』電子批評校訂版 ENCCRE のウェブサイトに掲載された。

(2) 平成28年度には、典拠文献の解明と主

要執筆者の中国観の分析をおおむね完了させた。典拠の解明については、クロード＝フランソワ・ランベールの『奇習集成』、文芸アカデミーおよび科学アカデミーの論集、ジェイムズの『医学辞典』などの調査で進展を見た。とはいえ、典拠研究において完全を期することは難しい。安易な断定は慎み、個別の事例について判断材料を提供することに主眼を置いた。主要執筆者の中国観の分析については、デイドロ、ドルバック、ジョクールに対象を絞った。

(3) 平成29年度には、『百科全書』全体の中国観の分析に力を注ぎ、一定の成果を得た。『百科全書』全体の中国観は、主題と評価の多様性によって特徴づけられることが浮き彫りになった。主題の多様性とは、上記(1)の項目分類で示したように、地理や歴史に始まり、政治、宗教を経て学問や技芸に至るまで、あらゆる角度から中国が論じられていることを指す。18世紀のフランスにおいて、中国は単なる異国趣味を超えた思想的課題であった。評価の多様性とは、中国に対する高評価と低評価が混在していることであり、さらには論点に応じてその都度是とも非とも見なす立場すら認められることである。要するに、『百科全書』の中国観をひとことでまとめることができないほど、『百科全書』は多面的な中国表象を示しているのである。

(4) 三年間を通じての研究成果をまとめると、以下の通りである。

第一に、『百科全書』には711に及ぶ中国関連項目が存在し、それらはテーマによって12に区分可能であった。概論項目としては、デイドロ執筆の《中国人（の哲学）》が存在するが、これがまさに哲学を論じていることが、『百科全書』の中国観の所在を端的に示している。地理および博物学を扱う項目の大半は、分量が少なく、見出し語のリストを充実させるために組み入れられたと見なしうる。歴史については、中国の太古性が検討に付される。政治については、モンテスキューの『法の精神』が背景に控えており、そこで論じられた問題が異なる文脈のもとで扱われている。通商に関する項目は、サヴァリーの『商業辞典』から借用されたものが多くを占める。哲学宗教は概論項目の各論に相当するが、儒教を扱った項目群は典礼問題を蒸し返す効果を発揮した。習俗に触れた項目は、やや異国趣味に傾く嫌いがある。

言語の問題は、ヨーロッパ言語とはまったく異なる構造と文字への関心に裏打ちされている。学問のうち、とくに百科全書派の興味を惹いたのは、天文学（古代の天体観測）と医学（脈拍理論）であった。技術への関心も多岐にわたるが、最も重要なのは陶磁器の製法である。イエズス会士ダントルコール神父による報告がそのまま利用されている。

その他として、「異国」の代表として中国

が引き合いに出される事例が散見されることを指摘しておこう。

第二に、『百科全書』の中国関係項目は、ほとんど常に何らかの典拠をふまえて書かれている。それらの典拠は、大きく三つのグループに分けられる。すなわち、『百科全書』に先行する諸辞典、中国を扱った概説書、中国に部分的に言及するその他の文献、である。百科全書派が系統的に利用したのは、諸辞典と概説書であった。

第三に、主要執筆者の中国観は「人それぞれ」としか言いようのないほど多様であった。ジョクールは比較的分かりやすい態度を示しており、中国を批判的にとらえている。対比的読解の手法によって、典拠文献に盛り込まれていた讃辞をわざわざ削除するほどの念の入れようであったことが明らかになった。ドルバックはもう少し複雑で、匿名のままさまざまな解釈に荷担し、内部矛盾を演出した。ディドロは親中国と反中国の論争そのものから距離を置く姿勢を維持した。

このように、『百科全書』における中国表象は、ひとことで要約することを許さないほど多様であったと言える。18世紀のフランスを通じて、親中国から反中国への緩やかな移行が観察されるとはいえ、『百科全書』をその論争のなかに単純に位置づけることは難しい。極めて妥当であり、ある意味では平凡な結論が導かれることになったが、このような中国表象を具体的に描き出したことこそ、本研究が内外の学界に提示しうる成果である。

研究成果の全体は、フランス語で公表することを意図していた。個別の項目の要点を記し、判明した典拠を掲げ、テーマごとに小括を試み、主要執筆者の中国観をまとめていると、すでに300ページを超えてはいるが、まだ完成させるには至っていない。なるべく早く、フランス語の著作として公刊できるよう、今後も継続してこの課題に取り組みたいと考えている。

なお、当初の研究計画では、『百科全書』のほかに『トレヴー辞典』およびモレリ『歴史大辞典』の中国関係項目を整理・分類することにしていた。両辞典に収録された中国関係項目のうち、主要なものは調べられたものの、網羅することはできなかった。その点は深く反省しているが、周辺文献にまで研究が及ばない可能性は申請時に考慮に入れており、『百科全書』に限定すれば成果は十分に上げられた。

## 5. 主な発表論文等

〔図書〕(計2件)

逸見龍生、小関武史(編)、マリ・レカ＝ツィオミス、オリヴィエ・フェレ、フランソワ・ペパン、逸見龍生、小関武史、井田尚、イレヌ・パスロン、アレクサンドル・ギルボー、小嶋竜寿、寺田元一、井上櫻子、川村文重、飯田賢穂、淵田仁

(著)、百科全書の時空、法政大学出版局、2018、406(113-135)

Simón Gallegos Gabilondo, Takeshi Koseki, Gilles Palsky, Evgeniy E. Rychalovsky, Nicolas Verdier, M. A. Petrova, K. Kuntzel-Witt, J. F. Furtado, D. Kopelev, L. Gauci, M. Frumin, S. Mezzine, N. Plavinskaia, P. Zaborov, Serguei Karp, K. Goltsova, E. Lebedeva, E. Sharnova, M. A. Pozharova, M. Schippan, *Век Просвещения (Le Siècle des Lumières)*, V, Российская Академия Наук (Académie des Sciences de Russie), Наука, 2015, 584 (27-42)

〔その他〕(計1件)

ホームページ等

Notice sur « Le Dictionnaire géographique portatif de Vosgien », *Les sources de l'Encyclopédie*, Édition Numérique Collaborative et Critique de l'Encyclopédie, 17 juin 2015

<http://enccre.academie-sciences.fr/encyclopedie/documentation/?s=121&>

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

小関 武史 (KOSEKI, Takeshi)

一橋大学・大学院法学研究科・教授

研究者番号：70313450